日本建築学会九州支部研究報告
第 59 号　2020 年 3 月

大分県豊後大野市緒方盆地における集落構成
－集落構成・生活空間特性と生業の関係－

準会員○菊池絵梨子[*1]　同　藤田晃亘[*1]　同 姫野由香[*2]
同 濱田菜波[*3]

7.都市計画－6.景観と都市デザイン
集落構成　生活空間特性

1　序論

1-1.　研究の背景と目的

集落景観は，地域の風土や人々の生活・生業，文化などにより形成されている。そのため，各地域には様々な地域特有の集落・生活空間が存在し，独自の景観を構成している。このような，地区の生活や生業により形成され，その特徴を現在も継承している景観は，2005 年の文化財保護法改正以降，「重要文化的景観」として選定され，保護が行われてきた。

大分県豊後大野市緒方盆地[注1)]には，水田耕作を生業とした農村集落が存在し，盆地特有の地形により独自の景観を形成している。近年，この集落における景観を重要文化的景観として保護しようとする取り組みが行われている。文化的景観を継承するには，集落構成や風土，人々の生活・生業と，景観を構成する要素の関係を理解し，保全に努めることが重要である。

そこで本研究では，緒方盆地の生活・生業と集落構成や生活空間の関係を把握し，当該地域の景観の特性を明らかにすることを目的とする。

1-2.　研究の方法

本研究では，緒方盆地にある複数の集落から，盆地特有の地形と集落の関係が顕著に表れている上自在地区を対象とする。

はじめに，緒方盆地の景観に大きく影響を与えた歴史的な事象や緒方盆地の集落構成の特徴を把握するため，資料文献調査[1) 2) 3) 4)]を行った。次に，上自在地区の住民が，地区内で営む生活や生業に関係する要素を特定するため，住民へのヒアリング調査を行った。

また，緒方盆地の人々の生活や生業に特に影響を与えたと考えられる 1972 年の圃場整備以前から現在にかけての変化を，航空写真より確認し，生活・生業への影響を述べる。

その後，生活・生業に関する施設や，要素の分布を示した現在の集落構成図と，地区の特徴的な地形や家屋の断面図を作成する。これらの図面により，上自在地区の集落構成・生活空間特性と生活・生業との関係を明らかにする。

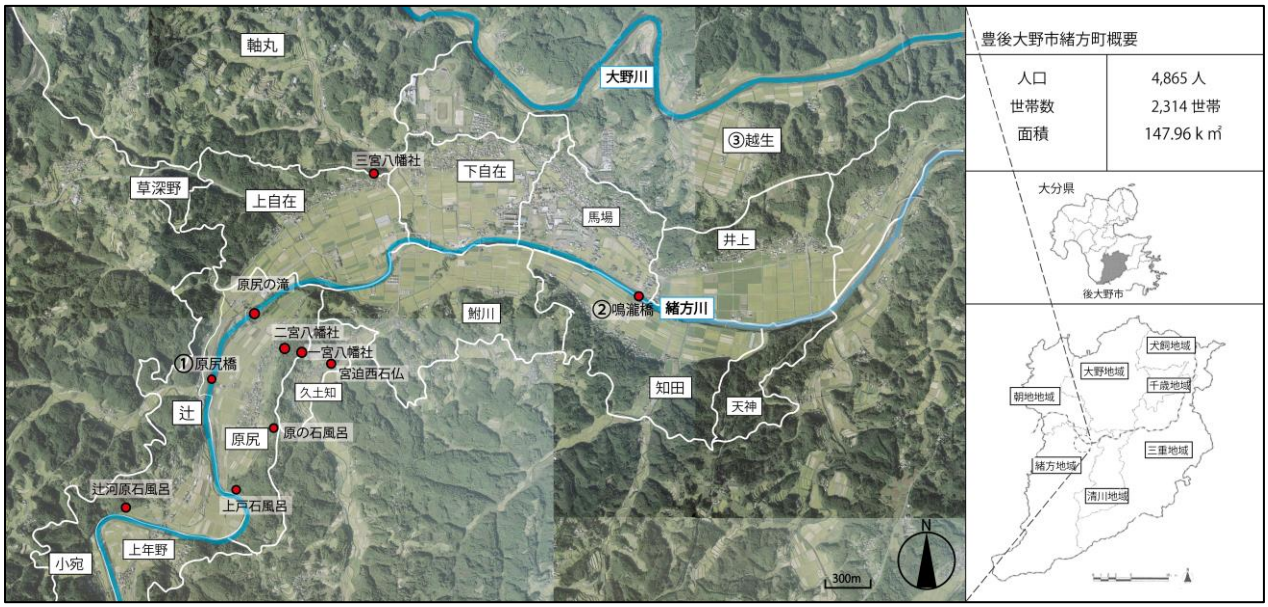

図 1　緒方盆地の概要〈参考文献 1）5）を元に著者が編集〉

The formation of Ogata settlement in Bungo-ono city of Oita Prefecture
-The relationship between the formation of settlement or living space and occupations-
KIKUCHI Eriko, HIMENO Yuka, HAMADA Nanami, FUJITA Akinobu

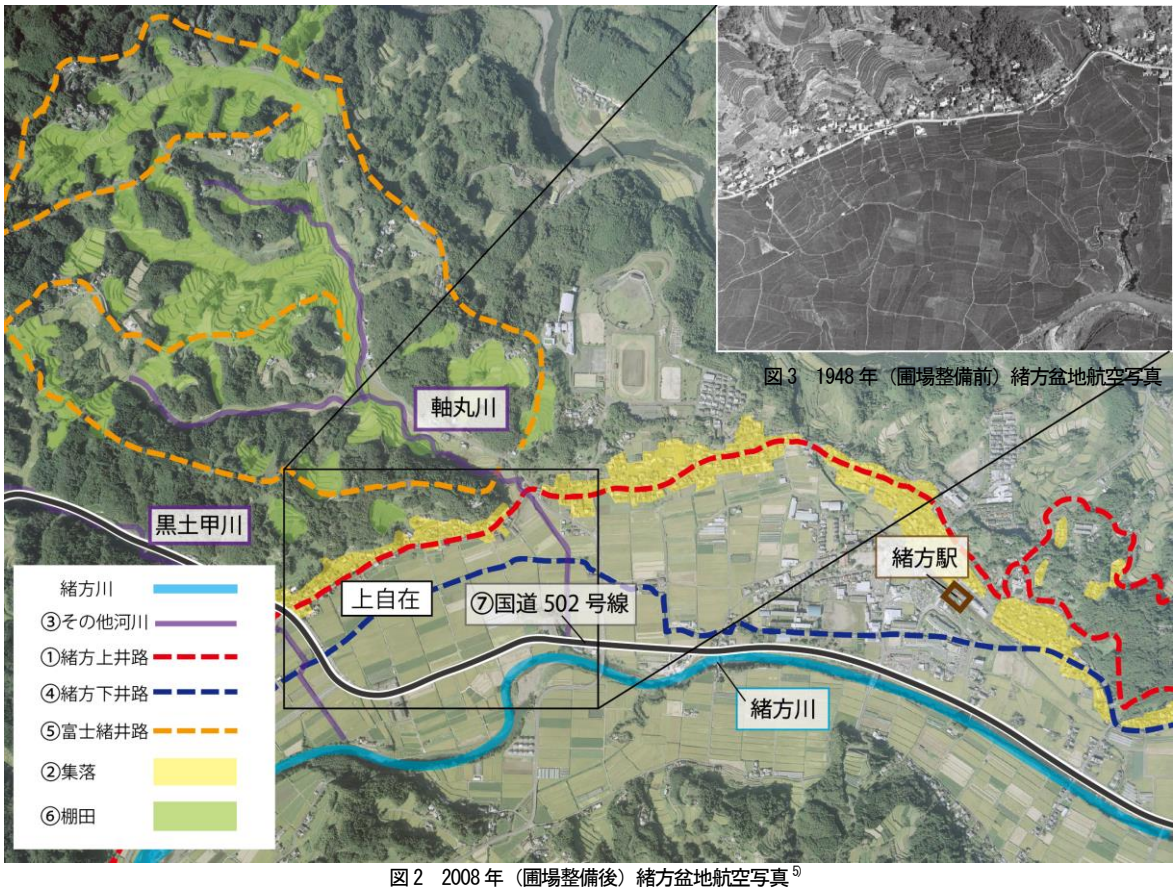

図2　2008年（圃場整備後）緒方盆地航空写真[5]

2　研究対象地

2-1.　対象地の概要

大分県豊後大野市緒方盆地は，大分県南部に位置する。緒方盆地の地形は，阿蘇火砕流堆積物により形成され，溶結凝灰岩に覆われている。そのため，緒方川の侵食によって形成された巨大な滝や，石風呂[注2)]，石仏などの石造文化が存在する。主な生業は農業であり，緒方川やその周辺の河川から井路（農業用水路）を引き込み，水田耕作がなされている。また，五穀豊穣を願い，一年を通して様々な祭りや民俗行事が行なわれる。

2-2.　対象地の歴史

緒方盆地では，水田耕作のため，1662 年に緒方上井路（図 2①）が開通し，井路沿いに集落（図 2②）が形成された。複数の河川（図 2④）から緒方上井路・緒方下井路（図 2③）に水を取り込み，水量を増やして下流の田に灌漑用水を送る仕組みが造られた。

明治以降の土木技術の発達に伴い，富士緒井路（1914 年通水，図 2⑤）などの井路が丘陵上に開削された。これにより，標高の高い山地での水田耕作が可能になり，台地にも棚田（図 2⑥）が形成された。

1922 年の緒方駅の開業によって，原尻橋（図 1①），鳴瀧橋（図 1②）などの石橋が多数建設されている。

1972 年には，越生地区（図 1③）で緒方盆地最初の圃場整備が行われ，上自在地区では 1974 年に起工し，翌年に完成した。これにより，圃場整備前は大きさや形が不揃いであった田（図 3）が，現在は整然としている（図 2）。また，国道 502 号線（図 3⑦）や緒方下井路などのインフラが整備されたことで，自動車の利用や農業の

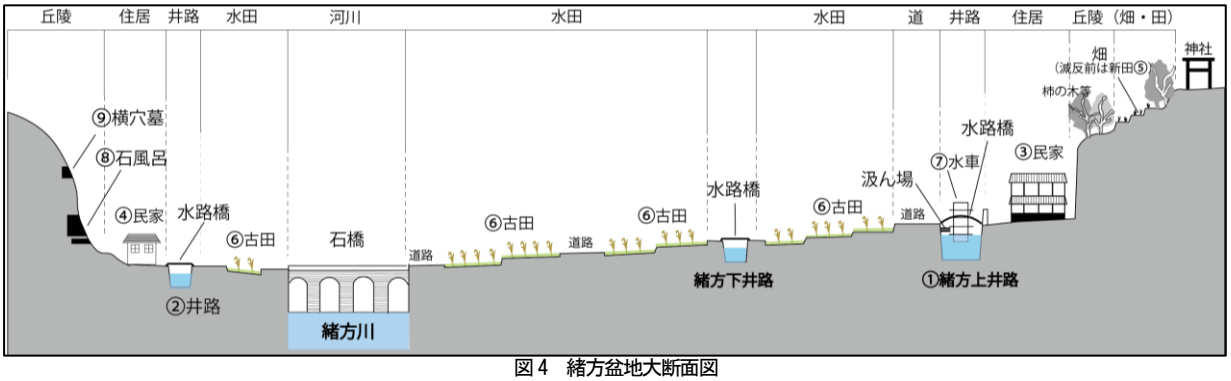

図4　緒方盆地大断面図

図5　上自在地区集落構成

機械化が進み，効率よく農業を行えるようになり，生活にも大きく影響を与えた。

3　集落構成と生活・生業の関係

3-1.　緒方盆地の地理的特性と集落構成

緒方盆地では，緒方川の侵食により形成された河岸段丘上に，緒方川から井路を引き込み，奈良時代から水田耕作がなされてきた。緒方川の両岸には，水田が広がり，山際に井路（図4①，②）と民家（図4③，④）が立地している。

1922 年，富士緒井路開通後に傾斜地に開かれた田は「新田（シンタ）」（図4⑤），それ以前からある段丘面上の田は「古田（コタ）」（図 4⑥）と呼ばれる。古田のある場所は，元は宅地や畑であった。1662 年の緒方上井路（図4①）の通水により，住居は全て上井路より山手側に移され，現在の集落形態となった。

1931 年の基盤整備で井路に水車（図4⑦）が新設され，上井路より山手側での水田耕作が可能になった。しかし，1965 年頃の減反政策によって，管理に手間のかかる上井路より山手側の田は畑として利用されるほか，耕作放棄地となり，水車は減少していった。水車は，観光用に残されているものもあるが，灌漑用の水車は下自在地区に一基のみ残っている。

また，柔らかく加工しやすい溶結凝灰岩に覆われた地形であるため，岩壁に多数の石風呂（図4⑧）や横穴墓[注3]（図4⑨）が設けられている。

3-2.　上自在地区の集落構成と生活・生業の関係

【農業】上自在地区ではかつて，水車（図5①）を利用した水田耕作を行っていた（図5②）。緒方上井路より山手側では畑作も行っており，図 5③の畑では，富士緒井路開通以前，「岡大豆」[注4]や桑が栽培されていた。ここは，富士緒井路開通後，新田（シンタ）となったが，減反政策により，再び畑として利用されている。そのため，現在上自在地区では，緒方上井路より下流の田（図5④）でのみ水田耕作がなされている。

【生活】上自在地区では「五千石祭[注5]」，「川越し祭り[注6]」といった祭事が行われる。これらは三ノ宮八幡社（図5⑤）で行われ，いずれも五穀豊穣を願う祭事である。また，年に2回3月と7月には弘法大師像（図5⑥）でお接待[注7]が行われる。三ノ宮八幡社や弘法大師像は，上自在地区の組合[注8]ごとに定められた係の住民により管理され，清掃などを行っている。祭りでは神楽[注9]が奉納されるが，三ノ宮八幡の神楽殿は老朽化により取り壊され，現在は上自在公民館（図5⑦）に保管している組み立て式の神楽台を利用している。

家屋前の井路には，石やコンクリート製の水路橋（図5⑧）がかけられ，家屋の住民や神社へ参拝する人々は，

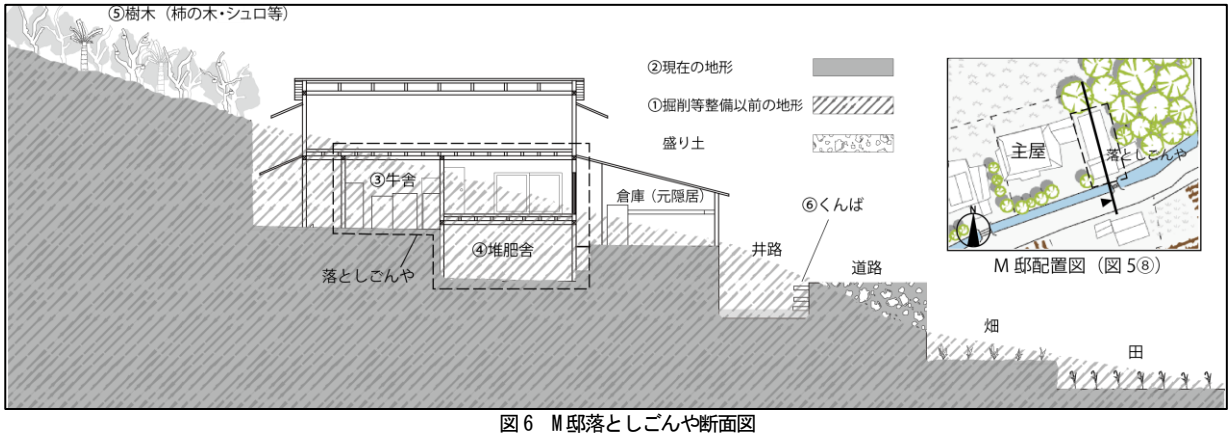

図 6　M 邸落としごんや断面図

この橋を渡らなければならない。そのため，これらの水路橋は，井路沿いで暮らす住民の生活に欠かせない要素であると言える。

4　緒方の生活空間特性

図 6 に示す家屋は，図 5⑧の M 邸である。緒方盆地の農家住宅の多くは，緒方上井路より標高が高い斜面地に建っている。盆地内には，この地形を活かし，「落としごんや」と呼ばれる二層式の牛舎・堆肥舎が数多く存在する。図 6 の断面図のように，溶結凝灰岩に覆われた斜面（図 6①）を掘削して，現在の土地（図 6②）を造成している。牛舎（図 6③）で役牛を飼い，牛の糞を堆肥舎（図 6④）へ落とし，堆肥を作っていた。農業の機械化が始まった 1965 年頃から家畜を飼わなくなり，圃場整備後は肥料も購入するようになったことから，現在は倉庫や車庫となっている。家屋の裏（図 6⑤）には，自給用に柿の木などの果樹や，農業用のロープをつくるために使うシュロ[注 10)]，農具の材料となるカシの木[注 11)]などが植えられている。

家屋の前の井路には「汲ん場（くんば）図 6⑥」と呼ばれる井路の水汲み場があり，およそ各住居につき 1 つ設けられている。圃場整備以前は，収穫した野菜を洗う際や，家畜や庭の水やり，生活用水などにも井路の水を利用していた。現在は利用頻度が減り，農繁期に農具を洗う際などに使われている。井路は田へ水を運搬するだけでなく，人々の生活のためにも利用されてきた重要なものであることがわかる。

5　総括

本研究では，緒方盆地における集落構成・生活空間特性と，生活・生業との関係を明らかにした。

緒方盆地の地理的特性と集落構成より，緒方上井路の開通によって斜面地に集落が立地し，その後の井路の開通や減反政策により，土地利用や水車などの設備が変化し，現在の緒方盆地の集落が形成されたことが分かった。

また，農村集落である緒方盆地では，五穀豊穣を願う祭事が「三ノ宮八幡社」で行われ，地域住民により管理されている。このことから，三ノ宮八幡社は，地域の生活や生業を支える重要な場であることが分かった。

生活空間特性では，掘削のしやすい溶結凝灰岩に覆われた斜面地に立地する集落の地形を活かし，住宅や，生業を支える小屋が建てられたことが分かった。住居ごとに設けられた「汲ん場」は，地域住民が，井路の水を農業用水だけでなく，生活用水としても利用できるようにするために不可欠であった。このことから，井路と汲ん場は住民の生活や生業を支える上で重要なものであることが分かった。

【補注】

注1)　本研究では，豊後大野市景観計画より，「緒方盆地文化的景観」として定められている 14 地区（図 1 越生を除く）を「緒方盆地」とする。
注2)　室内に蒸気を充満させて入浴する蒸し風呂の一種。16 世紀頃に作ったとされており，現在は正月などに利用されているものもある。
注3)　古墳時代後期に発達する墓地遺構。丘陵や崖などの岩盤に穴を掘り，埋葬空間をつくる。
注4)　この地域は江戸時代岡藩に属しており，当時は米と同等の価値があったため栽培されていた。
注5)　五穀豊穣を祝って秋分の日に行われる祭。神楽や獅子舞，白熊が奉納される。
注6)　緒方三社といわれる一宮八幡，二宮八幡，三ノ宮八幡の祭礼行事。
注7)　弘法大師の遺徳を偲ぶ日。通行人や子供達を菓子等で接待する。
注8)　上自在には 4 つの組合が存在する。一つの組合につきおよそ十数世帯が含まれる。
注9)　神をまつるために奏する歌舞。
注10)　ヤシ科の植物で，耐水性に優れている。
注11)　ブナ科の植物で，強度が高く，耐久性に優れている。

【参考文献】

1)　豊後大野市「平成 30 年度大野川流域の文化的景観『支流緒方川と緒方盆地の農村景観』保存活用計画等検討業務委託報告書」，2019
2)　豊後大野市教育委員会「令和元年度『大野川流域の文化的景観』第 1 回調査研究委員会」資料，2019
3)　別府大学文化財研究所「『平成 30 年度　大野川流域の文化的景観調査』報告書」，2019
4)　緒方町刊行「緒方町誌　区誌編」，2001
5)　国土地理院空中写真

*1　大分大学工学部福祉環境工学科　学部生　Undergraduate Student,Oita Univ.
*2　大分大学工学部福祉環境工学科　助教　博士（工学）　Research Associate,Dept. of Architecture, Faculty of Eng,Oita Univ., Dr.Eng
*3　大分大学大学院工学研究科博士前期課程　大学院生　Graduate Student,Oita Univ.